

## 「耐震構造の人間関係」形成に向けて学生の地域参加を進める事業

神戸大学学生震災救援隊

### はじめに

神戸大学学生震災救援隊は、1995年1月に発生した阪神・淡路大震災の救援活動を目的として結成された。震災の復旧期を過ぎた後は、学生も地域の一員として街に潜む課題に取り組むこと、そして地域に地震を跳ね返す「耐震構造の人間関係」を形成することを目的として活動を継続している。現在では、灘・神戸での地域活動に加え、全国各地の被災地における支援活動にも取り組んでいる。令和6年をもって、本団体は結成から30年を迎えた。

### 活動内容

今年度の活動の中から、令和5年度学生地域アクションプランの助成を受けた2つの活動について紹介する。

#### (1) 阪神・淡路大震災発災30年記念講演会

##### ①目的

発災から30年を迎える阪神・淡路大震災の伝承を図るものである。学外で実施することにより、幅広い年代の地域住民の参加を促し、地域全体での震災伝承や防災意識の啓発、さらには学生と地域住民との交流を促進することを目的とする。

##### ②内容

1月16日に灘区民ホール会議室にて開催し、オンライン参加も含めて52名が参加した。報告会は二部制とし、第一部では講師に上野政志さんをお招きした。上野さんは阪神・淡路大震災で当時神戸大学発達科学部に在学していた娘の上野志乃さんを亡くした。第二部は上野さんの講演を受けての参加者によるグループディスカッションを行った。

第一部では上野さんに震災当時の行動や感情、娘の志乃さんを亡くされた逆縁のつらさ、震災後からこれまでの生活や思いについてお話をいただいた。阪神・淡路大震災は、当時を知らない現役の学生にとっては遠いものとなっている。神戸大学の先輩であり、年齢も自分たちと近い志乃さんのお話をうかがうことで、震災を自分たちに引き付けて考えることができた。また、上野さんのお話に対して参加者の地域住民からは親の目線からの共感の声も寄せられた。

第二部では参加者が4名1グループとなり、講演会の感想や自身と災害のかかわりについて話し合った。参加者の年齢層は高校生から60代と神戸市在住の方以外にも東北地方で東日本大震災の伝承活動やボランティア活動に取り組んでいらっしゃる方も10人ほど参加された。属性の異なるグループメンバー間で、どの参加者も普段とは違う視点から自身の活動を振り返るきっかけとなった。学生からは震災を経験していない自分たちが伝承に携わる意味や、被災者とのかかわり方について震災を経験した世代に尋ね議論を交わす姿が見られた。

##### ③展望

地域に暮らす幅広い年齢層にご参加いただいたことは、大きな意義がある。震災から30年となり、地域でも震災経験世代とそうでない世代の隔たりは大きくなりつつある。今回の講演会は、多世代交流の場となった。来年度以降も同様の催しを継続することで、地域内で世代の壁を越えた震災記憶の継承、防災啓発に寄与したい。また、今回は現役学生が志乃さんに自分たちを重ねる様子、地域住民が親としての上野さんに共感する様子が見られた。今後も参加者に引き付けた講演会の開催を心掛けたい。

## (2) 神大えびすひろば

### ①目的

大学に近い水道筋商店街において定期的に休憩所を運営することで、学生と地域住民との交流の場を作る。学生も街の一員として地域活動に参加することで、属性を超えた地域のつながりを生み出し、弊団体が目指す災害を跳ね返す地域の「耐震構造の人間関係」の形成を目指す。

### ②内容

水道筋商店街理事会にご協力いただき、エルナード水道筋内みずほ銀行前のスペースをお貸しいただいた。活動回数は3回であり、腰を下ろせるベンチの設置や熱中症対策の冷茶の提供などを通して商店街に買い物に訪れた地域住民との交流を行った。

1月18日の活動では弊団体が所蔵する阪神・淡路大震災当時の神戸を写した写真を展示した。たまたま通りかかった多くの方が足を止め、皆さん自発的に当時の話をしてくださった。神戸の街は復興を遂げ震災の爪痕は見えにくくなっているが、地域住民にとっては今でも日常のすぐ近くにある出来事であることがうかがえた。

#### 〈1月18日住民さんの声（抜粋）〉

- ・都賀川で水を汲んだり洗濯をしたりした。
- ・近所の人と助け合った。誰かがもらってきたおにぎりをみんなで分けたり。ご飯はあったがおかずはなかった。やっときたおかずは鯖の水煮の缶詰、味ないしどうやって食べればいいやとなった。
- ・神戸製鋼でお風呂に入った。あそこは火を焚いているからお湯を作れた。
- ・介護の必要な母と重度障害の子を含む5人の子どもがいた。当時小学5年生だった息子を長野の姉の家に疎開させた。息子は「寂しかった」と今でも自分のことを恨んでる。子どもは分かってくれない、家族を抱えてどうしようもなかった
- ・たばこ屋さんで電話を借りたのですごい行列に並んだ。みんな気づいてなかったが、行列の横の家が今にも崩れそうだった。夫に「そんなとこに並ぶな」と怒られた
- ・犬も3匹くらい避難所に避難してた。夜になるとくーんと鳴く。しょうがないなとなって、中に入れて布団と一緒に寝てた。夜、「静かにしなさい、追い出されるよ!」という声が聞こえて、子どもが叱られてるのかと思ったら、飼い主が犬を叱ってた。このワンちゃん（展示してた写真に写ってる柴犬）に似てた。もう30年経ったから、あのワンちゃんももう亡くなってるかな。





### ③展望

活動の準備や調整に時間がかかったこともあり、3回しか活動を行えなかったのは残念であった。今年度で学生と地域住民とのつながりができたと評価するのは難しいが、今後の地域への参加に向けた第一歩にはなったと感じる。とくに1月18日に活動は、学生にとって神戸の人々の震災に対する思いを感じる非常に貴重な機会となった。今後も学生側からアクションをかける形で、地域の活性化、地域のつながりづくりに寄与していきたい。



### 終わりに

弊団体は2025年1月をもって結成から30年を迎えた。震災の爪痕を感じる機会は少なくなっているが、阪神・淡路大震災によって明らかになった社会課題はいまだ解決されたとは言いがたい。弊団体はこれからも市民の一人ひとりとして街に潜む課題を見つめ、その課題解決と相互理解を通じて地域のつながりづくりに寄与することで、災害を跳ね返す人間関係を持つ地域づくりに貢献する所存である。



(文責：代表 鈴木 蒼生)